

教内の福祉の歴史を論じるとは、歴史学の手法を用いて、教内の歴史を、福祉という視点を通して論考するということである。前回（2026年1月号）「社会福祉」について法的な定義や学会における統一された定義がないことを確認した。学会（おもに日本社会福祉学会）において、社会福祉の本質が議論され、「社会福祉」とは「制度・政策」なのか「方法・技術」なのか、という問いに対して、いまだ答えを見いだせていないのである。その一方で、統一された定義を求める研究の方法として、歴史学の手法を使った研究がある。わが国では「社会事業史研究」と呼ばれている領域である。

そこで今回は、教内の福祉史を論考する前に、「歴史」および「歴史学」について論じることとする。言うまでもないが、筆者は歴史学については門外漢であるため、あくまでも一般論の域を出るものではない。

歴史とは何か？ その古典として E. H. カーの論考がある<sup>(1)</sup>。カーは、歴史とは「歴史家と事実との間の絶えざる相互作用」であるとして、歴史的事実は「与えられるものではなく、つくられる」と述べている。また「現在と過去との間の絶えざる対話」でもあるという。このようにカーは、歴史家が歴史を作りあげるので、「客観的歴史」は存在不可能だと主張する。

次に、歴史学研究について検証したい。フランスの古代史学者のフランソワ・アルトール<sup>(2)</sup>は、歴史学研究のスタンスを次の三つに分類している。第一は「過去主義」である。過去は教訓にみちあふれているので、教訓を得るために歴史学があるという考えである。天理教における「教組のひながた」がこれに類似するといえよう。ただし、教訓と「ひながた」がイコールとはいえない。天理教を信じる者にとって「ひながた」は、教訓として指示的な意味もふくむが、むしろ日々の生活指針、人生のモデル、信仰者の目指す道しるべそのものという意味合いが強い。本稿の目的に照らし合わせると、教内で展開されてきた福祉活動や福祉事業から教訓やあるべき姿を導くということである。

第二は「未来主義」である。これは進歩のプロセスとゴールを描くことである。つまり「陽気ぐらし」への道筋を描くことである。本稿で言うと、教内に福祉がどのように展開あるいは定着していくべきかを論考することである。

第三は、「現実主義」である。歴史は複数の原因と複数の結果が渦巻いて今に至っている。言い換えれば「因果関係の束」なのである。歴史学は、この束の中から、歴史学者が問題関心にもとづいて、自分が重要だと思うことを選択して、そのメカニズムを分析する営みと言える。本稿の軸足はここにある。つまり、教内の歴史の束から、福祉に焦点をあてて、福祉の機能的な要因を分析して、かつ未来へ提言することが執筆の目的である。福祉に焦点をあてると言っても、すべてを完全に捉えられるものではない。つまりそこには論者の選択があり、それは主観的な営みなのである。カーの主張のとおりである。

再度歴史学について検討したい。古代ギリシャで執筆されたペルシア戦争を題材とする書である『歴史』（ヘロドトス著）や中国の司馬遷が編纂した『史記』などが、まとまった歴史書

の嚆矢だと言われている。だが、現在の歴史研究の祖は、19世紀の歴史学者レオポルト・フォン・ランケ（1795～1886）である。彼は実証主義を唱え「それ（過去の事実）は実際いかなるものだったか」を明らかにすることが歴史研究だと主張した。それは、次の三つのステップからなる。第一に資料を収集する、第二に資料を批判（正しい部分と間違えた部分の分別）する、第三に正しいと判断した資料にもとづいて、過去の事実を記述する。このような過程を経て成立する歴史学は、実証主義に加えて、公文書至上主義（私文書より、公文書の方が信頼性が高く、客観的だとする考え）と史料批判によって成り立っている。

このような主義は、現在まで有効な方法として活用されている。教会本部から公刊されている『稿本天理教教祖傳』編纂の中心的な役割を果たした中山正善 2代真柱の足跡にもみられる。飯田照明は『世界たすけの偉大な足跡』<sup>(3)</sup>において、「教祖伝編纂では『正確さ、実証性、真実』を徹底的に追求された」と述べている。加えてこの姿勢のあらわれとして、現在公刊されている天理教教祖傳を「底本」とせず「将来万が一にも新しい資料が発見されたなら修正される可能性はゼロではないとし、その時に加筆、或いは修正できるようにと、『稿本』という言葉を表題に冠せられた」と述べている。これらの基本姿勢は、『天理教教典』をはじめ、本部から刊行されている原典学や教学に一貫している。

話題を歴史学の歴史に戻す。先述したように、神話や王朝の歴史叙述あるいは哲学的・文学的記述が中心だった歴史書に対して、実証主義に依拠した歴史学を創成したランケ学派へも批判の矛先が向けられる。一つは、経済の動向が歴史の流れを規定するという「マルクス主義歴史学」である。もう一つは、「アナル学派」と呼ばれる研究動向である。この呼称の由来は、ストラスブール大学のリュシアン・フェーヴルとマルク・ブロックによって創刊された研究雑誌『経済・社会年報（アナル）』であった。遅塚忠躬によるとその特徴は「19世紀的な旧来の歴史学が政治史や外交史のような『事件史』に偏重していたことに対する反発」であり、その「奥にあって目立ちにくい層（たとえば庶民の日常生活とか人々の心性とか）に着目し、その層を仮に『社会』と名付け」研究対象にしたことだ<sup>(4)</sup>という。ここで福祉（あるいは社会福祉）が研究対象になるのである。

歴史学の歴史をひもといたが、ここで歴史学それ自体に疑問を呈する主張が外部の学問領域から歴史学者に突きつけられる。今回はこの批判について概観し、本稿がどのような歴史観をとるのかを述べたい。

[註]

(1) E.H. カー（1961）『歴史とはなにか？』なお日本語訳の初版は1962年（清水幾太郎訳）、岩波新書。

(2) フランソワ・アルトール（2003）『歴史の体制』（伊藤綾訳：2008）、藤原書店。

(3) 飯田照明（2020）『世界たすけの偉大な足跡—中山正善 二代真柱の功績—』養徳社、49～50頁。

(4) 遅塚忠躬（2010）『史学概論』東京大学出版会、40頁。